６月教役者逝去記念聖餐式説教　　堅信５１年　随想余話　　２０２３．６．１５．

今月は、教区報の巻頭言に文章を書きました。堅信５１年の随想　メメント・モリ　そしてそのメメント・モリというラテン語の意味「自分がいつか必ず死ぬことを忘れるな」という言葉が大きく掲載されました。

私は教区報の巻頭言とか、年賀状とか、１年に一度、多くの人に読んでもらう文章を書く時は、およそ６カ月前から、どんな内容にするか考え始め、２か月前には最初の文章をまとめて、親しい友人に読んでもらっています。書きたいことがありすぎて、限られた紙面では、いろいろ情報を切り捨てなければなりません。巻頭言の分量は、普段私が話す説教の三分の一くらいになってしまいます。

今回の教区報の記事を書くにも、もっと盛り込みたかったものがいろいろあったので、今日は「堅信５１年　随想余話」ということで、思ったこと、感じたことを語ろうと思います。

文章の書き出しには、６月に私が堅信式を受けたこともあり、ちょうど、６月１１日は５１年前の日と同じ日曜日だったことで、使徒聖バルナバ日という祝日の取り扱いが違っていて、文語の祈祷書の時代だったので、その日は使徒聖バルナバ日の赤い色の祭色で礼拝したことを書きました。

ところが、今年の６月１１日は、聖霊降臨後第２主日で、この日からは緑の祭色で礼拝します。そしてその日読むことになっている福音書、マタイによる福音書９章９～１３節。この日は、今年の教会暦・日課表を見ますと（特定５）と書かれています。このところ、Ａ年は、復活日が、４月２４日、２０日、１６日、１２日、と比較的遅かったので、今年この福音書が日曜日に読まれるのは、１５年ぶりだということも、おもしろい。これから３年毎にＡ年は２０３５年まで５回続けて特定５は読まれます。

先日の日曜日の福音書ですから、皆さんも印象に残っているかもしれません。１２弟子のひとりで、伝統的にはこのマタイによる福音書を書いた、マタイが、元は税金を取り立てる徴税人だったのですが、イエス様に声をかけられて、収税所に座っていたのに、仕事をやめて弟子になった話です。

実は、この出来事は、マルコやルカの福音書にも出てくる話ですが、そこではイエス様に従った人はマタイではなく、レビという人だったことになっています。どうして名前が変わったのか、ということと同時に、マルコによる福音書という、一番最初に書かれた福音書では、この徴税人のことが、「アルファイの子レビ」と書かれています。これも面白いのです。

どうして、こうなったのか、いろんな注解書や説教を見てゆくと、定説はないのですが、マタイとレビは同一人物ではないか。そして１２弟子の中に、アルファイの子ヤコブというのがいるので、１２弟子の中には、ペトロとアンデレ。ゼベダイの子のヤコブとヨハネという二組漁師の兄弟がいたが、アルファイの子のヤコブとマタイも３組目の兄弟ではないか。弟子たちが教会を作っていく間に、マタイの教会は大きくなって福音書を作るまでに成長した。そんな有力な教会の指導者に遠慮して、マルコやルカの福音書はマタイがユダヤ社会で嫌われた徴税人であることを隠して、彼らの出身のレビ族の名前に入れ替えたが、指導者のマタイは、それを隠さず、自分が徴税人だったことを堂々と書いたのではないか。

まあそんなことで、徴税人だったマタイあるいはレビが弟子になった話は３つの福音書に出てくるのですが、マルコを中心に読むＢ年やルカを中心に読むＣ年の一年間の聖餐式の日課表を調べても、日曜日の聖餐式で読む福音書には指定されていません。ですから、先日の徴税人が弟子になる話は、１５年ぶりに読まれる福音書のお話だということも面白いと思うのです。

さて、話を元に戻すと、１９７２年６月１１日に堅信式を受けた私は、中学一年生の終り頃に、堅信準備で「ウィルソン神父のカテキズムによるたのしい問答会」という本に出会い、男の子と女の子とテントの絵や、他にもたくさんの絵があったので、教会のあまり聞いたことのない教えを、それらの絵を通して学ぶことになったのです。

それから２０年後に、福山に帰省した時、私が中学生の時にその本を貸して下さった牧師さんとその話になりました。そしてその本を訳した、小坂井澄夫という人に、連絡を取ることになります。この人は、名前から最後の夫を外して、小坂井澄というペンネームで、カトリックの作家になった人です。

最初の本には、６分冊の２冊分だけの翻訳だったので、続きを読みたいと思いましたが、それは訳していない、ということでしたので、イギリスで当時勉強中だった石田みち子さん（この方は後に九州教区の司祭になったのですが、１６年前にがんのために亡くなられました)、この石田さんがその本を探して、私の所へ送ってくださったのです。

ここでもう少し、おもしろい話をすると、石田さんからこの６冊の本が届いた日、ちょうど私の住んでいた大牟田の教会には、イギリスから聖使修士会という聖公会の男子修道会のアントニーという修道士が来ていました。私の弟が２年間イギリスに行っていた時世話になった修道士で、日本に弟を訪ねて来て、私の所にも訪ねてきたのです。彼は石田さんが送ってくれた、そのカテキズムの本を懐かしく手にして話してくれました。それから２年後、私が６冊を訳して本にした時、著者の墓参りにイギリスに行くと、その修道士の配慮で、著者ウィルソン司祭に直接堅信準備の指導を受けた、というゆかりの人たちと会わせてもらえました。その人たちも、当時もうだいぶ高齢で、既に亡くなられましたが。

そしてもう一つ。最初にこのカテキズムを訳した小坂井澄さんにも私は訳した後で、東京に出張の時、やはり聖使修士会の修道士、村松執事が紹介してくださって、新橋駅の、丁度蒸気機関車の置かれている駅前の近くの喫茶店でお話することができました。そして現在も年賀状だけは毎年交換しています。

その小坂井さんから、昨年の年賀状を受け取るとそこには、「いろいろ考えて文章を書いておられるようだから、本にまとめてはどうか。」ということが書かれていました。

実は昨年の年賀状に書いたことが、今年の教区報の巻頭言の終りの方で私が触れた、お葬式での話に繋がるのです。私は毎年１２月には年賀状の内容を整える作業をするのですが、その間に次々と喪中のハガキがやってきます。特に私が学生時代や牧師の仕事をしている間にかかわりができた人が、２０２１年には大勢亡くなりました。大学生の時、神学部の有志で聖書研究会をしていましたが、その時の１年先輩の人が亡くなった。神学校で、元小学校や中学校の教師をしていた１１歳年上の同級生が亡くなった。またこのカテキズムの本を訳した時の日本語を指導して下さった福岡の信徒もなくなった。

特にその福岡の信徒からは、訳した本を出版した時、「著者の墓参りにゆきなさい」と言われて、ウィルソン司祭にゆかりの人々と出会うきっかけにもなったわけです。

私は宗像にいる頃から映画会をしていましたが、特に印象に残っている映画で「最高の人生の見つけ方」というのがありました。末期がんの宣告を受けた二人の男が、死ぬ前にやっておきたいことを「棺おけリスト」として書き出して、実行する話です。この映画会をした時、ある夫婦が来られました。その時には何も言われませんでしたが、後日夫は末期がんで亡くなった、という話を妻の方から手紙をいただいたことがありました。それもあって、宮崎でも２度ほど映画会でその映画をとりあげました。

私は年賀状の内容を考えている間に、たくさんの喪中のハガキがくるのですが、その人たちには、年賀状の内容よりも、少し分量を増やしたり、画像を加えたクリスマスの便りを作って、クリスマスカード代わりに出しています。

これを行うようになったのは、今から２７年前に亡くなった、柴田赳二司祭から「喪中の人に年賀状を出すのは失礼かもしれないが、そんな人には、クリスマスカードを出して、慰めたり、励ましたりすることが大切だろう。」と言われたことがあって、実行しています。

映画の話に戻りますが、「最高の人生の見つけ方」の中で、末期がんのふたりが、ピラミッドの上で話している時に、彼らは生きることの意味を語り合います。そして、エジプトの人たちの古い民話で、人間は死んだあと、天国への門の前で神様から二つの質問を受けるということらしい。①自分の人生に、喜びを見出せたか？②他人の人生に、喜びを与えられたか？という２点だというのです。

自分の業績が立派かどうかではなく、自分の人生を楽しめたか、喜べたか、というのが第１点です。そして自分だけが楽しむのではなく、自分の存在が人々を喜ばせることになったか、という問題が第２点。自分だけが有頂天になっても、周りの人々の喜びに結び付かず、ただねたみを起こさせるなら、その人の人生は、空しいのではないか。喪中の人にクリスマスカードを送るというのは、２番目の問いに答えられるものではないか、などと感じるわけです。

いろんなことを言いましたが、１０代の子どもたちに何を伝えるか、ということですが、私は日曜学校の式文に載っていた、口語聖書の伝道の書１２章１節（現在のコヘレトの言葉ですが）「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。」という聖句が頭に浮かぶのですが、その数節後７節目に「ちりは、もとのように土に帰り、霊はこれを授けた神に帰る。」という言葉を一緒に覚えることが大切なのではないか。「自分がいつか必ず死ぬことを忘れるな」メメント・モリを教えなければならないのです。

そして限られた私たちのこの世での時間を、自分が楽しむ事が大切ですが、それと同時に周りの人々が、生きていることを喜べるように、わたしたちが生きることが大切だと伝えてゆくことが子どもへの信仰教育の中心であるべきだと思うのです。

それを実行するために意識して行うことは、「赦す、誉める、励ます、助ける」ということで、柴田司祭が勧めてくださった、喪中の人にクリスマスカードを出す、というのもその一つだと思うのです。